

開催日時：2022年8月5日（金）15:00-17:00

開催場所：大阪公立大学(中百舌鳥キャンパス)およびZoomウェビナーのハイブリッド開催

参加者： 学長・副学長・教授を中心に62名（人社：8名）

議論の主なテーマ：大阪公立大学の総合知に関する取組み事例の紹介、総合知活用の課題と評価指標について意見交換を行った。

プログラム概要：

- ・内閣府より総合知の説明
- ・総合知の活用事例紹介
- ・総合知を活用する場の掲載について
- ・総合討論

事例紹介：「すべての子供の社会的孤立・孤独・排除を予防する学校を中心としたシステム（YOSS）の開発」（現代システム科学研究科 教授 山野 則子）

子どもをめぐる問題は、貧困や孤立、虐待、不登校、非行など多岐にわたり、かつ相互に深く影響し、結果として子どもたちの社会的排除を生む。コロナ禍によって、この悪循環に陥るリスクを内在した子どもが爆発的に増加している。

誰一人取り残さず、子どもを社会的支援につなげていくために、子どもをめぐる問題の解決に向けた好循環を生み出すことが求められている。

YOSS（Yamano Osaka Screening System）は、学校を拠点に、支援が必要な子どもを抽出し、適切な対応や既存の社会的支援につなげていく仕組みである。AIによる判定機能を盛り込み、客観的データに基づいた支援を重視し、教師や支援側の能力強化や連携促進機能をシステム内に組み込むことで子どもをめぐる社会的セーフティネットの網の目を飛躍的に細かくすることを目指す。

YOSSは、社会福祉学、教育学のみならず、工学、情報学、経営学、評価学など様々な領域の専門知を活用して研究を進め、民間企業、自治体など多様な主体が協働したことで社会実装にあたっての多くの課題を解決し、実現している。今後はさらに、総合知を統合して内在化した形でのコンソーシアム設立を計画している。

総合知を活用する場の掲載について：「イノベーションアカデミー構想」（副学長（産学官協創・知財担当）藤村紀文）

本構想では「産学官民共創リビングラボ」機能を、大学が持つすべてのキャンパスに配置し「ネットワーク型イノベーションエコシステム」の構築をめざしている。ここでは、産学官民が課題を共有し、課題解決のためのプロジェクトをデザインし、その推進において、「リビングラボ」として社会実装に向けた実証実験を繰り返す。そこから新しい価値の創造と、新しい社会に向けた提案が生まれ、その過程で、人材が育成され、スタートアップ企業が生まれる。

討論における主な意見

(場の構築)

- この人であれば信用できるという部分と理論面で取り組むことが総合知の推進に必要。
- 色々と専門性が違うが、一つのターゲットゴールに向かうのが当たり前のようなマネジメントが出来る組織になることが重要。お互いがお互いでどういう風になっているかがわかると、相互作用（インタラクション）が生まれてくると思う。

(人材育成)

- 相手の意見を聞きつつ、合意を取り付けるという教育が必要。
- 高校で探求型の学びが取り入れられてきているが、大学でいったん途切れるのはよくない。
- 現代システム科学域では、持続可能なシステムを作るための課題解決に取り組んでいる。文理融合で、所属する学類に関わらず興味のあるテーマを学んだ上で、学部に関係なくあらゆる学生が集まる。グループワークのProject-Based Learning (PBL) を必修としている。

(人材活用・キャリアパス (評価))

- 社会課題を解決するための絵をどれだけ描けたか、で評価する仕組みと、その人に対するインセンティブの設計をする必要がある。
- 複雑な問題をほぐしていける人が一番大事で、そのような人を評価できる仕組みづくりが必要。

(総論)

- 社会課題の解決が重要であることに異論はないが、それを強調するあまり基礎研究がおろそかにならないように注意する必要がある。また、基礎研究を進めるうえでも狭い視野にとらわれずに学問の総合という観点が必要であることにも留意すべきだと考えた。(アンケートより)